

1. はじめに

現代英語では主語指向の数量詞遊離は可能だが、目的語指向の数量詞遊離は許されない。一方、古英語では主語指向の数量詞遊離が可能であるだけでなく、目的語指向の数量詞遊離も可能であった。また、現代英語では非対格動詞や受動動詞の補部位置に数量詞が残置されることはないが、古英語ではこの位置での残置が可能であった (Bartnik (2011), van Gelderen (2022))。 (1) は受動文の主語の例、(2) は目的語の例である。

- (1) ac hys wundra næron awritene ealle
 but his horrible-deeds were-not written all
 ‘but all his horrible deeds were not written’ (ÆHom 6.318/Bartnik (2011: 143))

- (2) Soðlice þæt ic eow secge eallum
 truly that I you say all ‘Truly, I say that to you all’ (Mk (WSCp) 13:37)

本稿では、現代英語では許容されない (1), (2) のような文末遊離数量詞が古英語で観察されていたのは、数量詞が主要部ではなく、XP 範疇であったことに起因すると論じる

また、英語の歴史をとおして、目的語代名詞と数量詞の語順は「代名詞－数量詞」語順が優勢だが、主語代名詞と数量詞の語順は「代名詞－数量詞」語順と「数量詞－代名詞」語順の両方が、古英語・中英語では観察されている。主語代名詞とは異なり、目的語代名詞が数量詞に先行する語順が通時的に一定数を保っているのは、数量詞の音韻特性が関係していると提案する (cf. Maling (1976))。

2. 代名詞と数量詞の語順の推移

現代英語では、主語が代名詞の場合も目的語が代名詞の場合も「数量詞－代名詞」語順は非文法的であり、「代名詞－数量詞」語順のみが可能である。一方、古英語・中英語では、目的語代名詞と数量詞の語順は少数の例外を除いて「代名詞－数量詞」語順が優勢だが、主語が代名詞の場合は「代名詞－数量詞」語順も「数量詞－代名詞」語順も観察されていた。古英語の目的語の例を (3), (4) に、中英語の目的語の例を (5), (6) にそれぞれ示す。また、代名詞と数量詞の語順の分布を表 1 に示す。

- (3) ac wentst abuton þæt ðu ealne hine geseo;
 but turn about that thou all it see
 ‘but turnest it about, that thou mayest see it all’ (ÆCHom I 341.172)

- (4) 7 he us ealle gebletsað 7 gehalgað
 and he us all blesses and hallows
 ‘and who blesses and hallows us all’ (ÆCHom I 328.75)

- (5) And oure soule, bi vertewe of þis reformyng grace, is mad sufficient at þe fulle to comprehende **al him** by loue
 (CMCLOUD,18.96)

- (6) and he gretys **you all** well (CMMALORY,193.2876)

表 1. 古英語における代名詞と数量詞の分布 (Yanagi (2008, 2012))

| | 主語 | | 目的語 | |
|-----|-------------|-------------|-------------|----------|
| | 代名詞-all | all-代名詞 | 代名詞-all | all-代名詞 |
| 古英語 | 359 (77.7%) | 103 (22.3%) | 164 (98.2%) | 3 (1.8%) |
| 中英語 | 80 (47.1%) | 90 (52.9%) | 113 (99.1%) | 1 (0.9%) |

3. 形態統語的・音韻的分析

3.1. 文末遊離数量詞の認可

古英語の数量詞 call ‘all’ は現代英語の all とは異なり屈折する。そこで、Saito (2018, 2020) の分析を援用し、たとえば、古英語の eallne ‘all’ は [QP [Q call] [K -ne]] という構造をしていたと仮定する (Yanagi (2022))。一方、屈折しない現代英語の数量詞 all の構造は [Q call] である。(1), (2) のように文末 (動詞の補部) に残置された古英語の数量詞は、併合した V との間に X-YP 関係が成立するため、問題なくラベル付けがなされる。一方、現代英語の数量詞は主要部であるため、動詞の補部に残置された数量詞と併合した V は X-Y 関係となり、適切にラベル付けがなされず、非文として排除される。

3.2. 「代名詞－数量詞」語順の派生

本節では数量詞と代名詞との語順について論じる。3.1 節で論じたように、古英語と現代英語では数量詞の範疇は異なるが、いずれの時代においても代名詞と併合した場合、適切にラベル付けがなされる。現代英語の場合、数量詞も代名詞も主要部と仮定し、素性共有によりラベル付けされると仮定する (cf. Chomsky

(2013: 46)). また、中英語では屈折語尾は消失するが、現代英語と同様に、ラベル付けは適切になされる。

このように、英語の歴史をとおして、数量詞と代名詞の組み合わせはラベル付けにより統語的に認可される。しかしながら、容認される語順には制限がある。この語順の制限は、音韻的に決定されると提案する。現代英語において、Maling (1976) では Q-Pro Flip という操作が提案されており、代名詞 (Pro) は数量詞 (Q) よりも音韻的に弱いため、Q と Pro の語順がひっくり返る (flip)。そのため、現代英語では「代名詞-数量詞」語順のみが容認される。ただし、目的語代名詞に強勢が置かれる場合「数量詞-代名詞」語順も可能である。

現代英語とは異なり、古英語・中英語における代名詞と数量詞の語順に関しては、主語と目的語の分布の違いは、頭子音 (onset) が関与していると論じる。Rochman (2005) によれば、all は頭子音を欠く単音節の機能語である。多くの言語と同じように、英語においても頭子音をもつ音節が好まれるため、頭子音を欠く all は音韻的に頭子音を得られる位置に生起する。また、韻律的には弱要素と結びつき、頭子音を得る位置に生起するため、数量詞と共起する要素は弱要素でなくてはならない。代名詞は弱要素のため数量詞と融合するが、動詞は強要素のため数量詞とは融合しない。ただし、数量詞 all と代名詞が融合し、その複合体がさらに動詞と融合することは、(7) が示すように可能である。

(7) She [sawall] [= She saw them all] (Rochman (2005))

古英語と中英語における複数形代名詞の一覧を表 2 に示す。

表 2. 古英語・中英語の複数形代名詞

| 時代 | 一人称 | | 二人称 | | 三人称 | |
|-----|-----|-----|-----|-----|---------|------|
| | 古英語 | 中英語 | 古英語 | 中英語 | 古英語 | 中英語 |
| 主語 | we | we | ge | ye | hie | they |
| 目的語 | us | us | eow | you | hie/him | them |

複数形主語代名詞は古英語・中英語ともに母音で終わっている。主語代名詞 we と数量詞 all の語順を考えた場合、all we の語順でも we all の語順でも数量詞 all は頭子音を得ることができない。そのため、基本語順を反映させた all we 語順も we all 語順と同様に可能であったと考えられる。

一方、複数形目的語代名詞は、us, him, them のように尾子音を含む語があり、主語とは異なり、全てが母音で終わるわけではない。目的語代名詞 us と数量詞 all との語順を考えた場合、all us の語順では数量詞は頭子音を得ることができない。これに対し、us all の語順では数量詞 all は頭子音を得ることができ、音韻的に安定する。そのため、主語代名詞の場合とは異なり、目的語代名詞では all us 語順よりも us all 語順が卓越している。

4. 結論

本稿では、英語史における数量詞の遊離可能性と語順の変化について、形態統語論的・音韻的分析を提案した。文末遊離数量詞に関しては、数量詞の統語範疇が QP から Q に変化したと提案した。古英語では適切にラベル付けがなされるため、文末遊離数量詞が容認されるが、現代英語ではラベル付けが適切になされないため、容認されないと論じた。

また、代名詞と数量詞の語順については、統語的には認可されるが、音韻的制約により語順が決定すると提案した。具体的には、古英語では、統語規則 (短距離接語化) が適用され、場合により音韻規則が適用される。中英語になると、数量詞の範疇が QP から Q に変化したことにより、数量詞と代名詞が対等の主要部となる。その結果、音韻規則が優勢となる。ただし、主語代名詞が数量詞の前に移動しても、数量詞は頭子音を得られないため、代名詞は移動する必要がないという理由から、主語では「数量詞-代名詞」語順の割合が増加する。最後に現代英語では、強勢規則が優勢となり語順決定に関与するようになる (Maling (1976))。そのため、主語・目的語ともに、強勢が置かれる数量詞が音韻的に弱い代名詞に後続する語順のみが容認されるようになる。今回扱わなかった近代英語の語順決定に関しては今後の研究課題とする。

参考文献 (抜粋)

- Bartnik, A. (2011) *Noun Phrase Structure in Old English*. Wydawnictwo KUL. / Gelderen, E. van (2022) *Third Factors in Language Variation and Change*. CUP. / Maling, J. (1976) "Notes on Quantifier-Postposing," *LI* 7, 708-718. / Rochman, L. (2005) "The Phonology of Floating Quantifier Placement," *Proceedings of IATL* 21. available at: <http://linguistics.huji.ac.il/IATL/21/TOC.html> / Saito, M. (2018) "Kase as a Weak Head," *McGill Working Papers in Linguistics* 25.1, 382-390. / Saito, M. (2020) "From the Explanation of Grammatical Rules by Syntactic Principles to the Explanation of Syntactic Principles: On Chomsky's Labeling Theory," *Energeia* 45, 13-37. / Yanagi, T. (2022) "Two Types of Cliticization and Quantifier Stranding in the History of English," *Phonological Externalization* 7, 131-144.

* 本研究は JSPS 科研費 20H01269, 21K00592 の助成を受けたものである。